

学校点描

1月1日から数えて、ちょうど半分が過ぎました。今週は評価テストが実施されます。1学期の学習の点検です。

《M中学校》

NO.7

R5. 7. 5

担当：校長

6月24日（土）、25日（日）に地区中総体後期大会の陸上競技がS市陸上競技場で開催されました。途中激しい雨が降ったり、突然気温が上昇したりなど、急激な天候の変化の中での大会となりました。結果、以下の選手が入賞しました。女子では、T・Mさんが、2年100m第3位、共通200mで第6位に入賞しました。S・Hさんが、共通800mで第3位に、2.3年1500mで第4位に入賞しました。また、低学年リレーでM中（T・Mさん、I・Mさん、K・Nさん、S・Rさん）は第3位に輝きました。男子では、共通400mでK・Kさんが第4位に、共通走幅跳でG・Aさんが第4位に、共通走高跳でN・Kさんが第4位に、2年100mでS・Jさんが第6位に、共通砲丸投でO・Iさんが第4位に、S・Sさんが第5位に入賞しました。1年1500mでO・Tさんが第7位に、3年100mでO・Sさんが第8位に入りました。低学年リレーでM中（K・Tさん、I・Yさん、S・Rさん、S・Jさん）が第7位に入りました。

「壁」になる覚悟

久しぶりに早く帰宅すると、夕方のテレビ番組の中で、夏の高校野球地方大会についての特集が放映されています。県内の各高校の野球部が1校1校紹介されました。部員数が少なく、複数の高校が合同で大会に参加する学校も増えてきた感じです。それでも、野球にかける情熱は今も昔も変わらないことは、インタビューを受けている部員の姿から見て取れました。

インターネットで読んだデイリースポーツの記事には、甲子園大会において、ボーク（投手が打者や走者を欺くような反則行為）を宣告した主審の林清一さんのエピソードが紹介されていました。25年前の夏の大会の2回戦で、愛知県代表の豊田大谷高校と山口県代表の宇部商業高校が対戦した話です。延長15回、誰もが予想もしていなかった「サヨナラボーク」で幕切れとなった一戦でした。

最近、わたし自身の出張が多く、生徒指導関連の会議に出ることが続きました。どの会議にもS警察署長さんや生活安全課長さんが同席して、最近の未成年の犯罪についてデータを使って説明してくれました。

少し前は、SNS等を通して、見知らぬ人とつながり、被害に遭う中学生が多くなったことについての注意喚起の話が多かったものです。今は、中学生がネットを通して誹謗中傷をして裁判に訴えられた事例や、怪しい裏バイトを請け負って逮捕されたりした事例の紹介が増えました。驚いたのは、ネットで大麻を手に入れて補導された未成年が管内にも増えてきたということです。小学生、中学生であっても、一般成人と同じ犯罪をする可能性がとても高い時代に入りました。ネットを通しての犯罪は、学校で指導する域ではなく、すぐに警察と連携して対応することを勧められました。インターネットにつながる機器を預けているのは保護者です。とすれば、ネットを介した犯罪

行為をさせないようにするには、保護者が「壁」となって児童・生徒を監督する、そうでなければネット端末は与えない、そういうことがこれからの家庭教育での常識にならなくてはなりません。

1998年8月16日甲子園大会の第2試合の豊田大谷高校と宇部商業高校の試合は白熱した延長戦にもつれ込みました。ピッチャーマウンドは40度以上。その試合は超満員の大観衆でした。

延長15回裏。豊田大谷高校は無死満塁の絶好機を迎えます。この試合の主審は林さんという方が行っていました。200球を超える球を投げてきた宇部商業高校のエース・藤田投手はこの場面で、林さんの想定になかった動きをします。プレート板に足をかけた藤田投手は投球フォームに入ろうとした手をストン、と落としたのです。主審の林さんは迷わず「ボーク」を宣告、サヨナラゲームとなりました。



5万人のスタンドが一瞬、静まりかえって、そこからざわざわする声に変わりました。林さんの直後の会見の中で、報道陣から「なんであんなところでボークを取るんだ」、「注意で終わらせられないのか」といったヒステリックな声も飛んできたといひます。当時は、四角四面の冷徹なジャッジとを感じる向きもあったかもしれません。世の中の大勢は、選手に同情的でした。

時に大人は、壁となって立ちただかり、「だめなものはだめ」と言うことにより、そこから若者は、押し波と引き波の境目を知るように、人としての生き方の“自由”と決してやってはいけない“義務”との境目を知るのでしょう。嫌われ役の「壁」になる方は、辛いものです。覚悟がないと、嫌われたくないという甘い意識に支配されます。



甲子園の、暗黙のルールとして、ウイニングボールは目立たないように、勝利校の主将にプレゼントされます。この試合は、ボールを投げる前にボークと言われた藤田投手自身の手にはボールが握られたままでした。林主審は2年生の藤田投手が涙ながらに渡そうとしたボールを「持っておきなさい。そして来年、また甲子園に来なさい。」と、受け取りませんでした。勝利校には、代わりに、自らのポケットからボールを出して渡しました。

その人間を信じ、期待し、この経験を力に変えてほしいという思いが「壁になる覚悟」でした。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。

Shinyatk1616n@yahoo.co.jp